

万吉だより

MA GECHI NEWS

第 26 号 平成 30(2018)年 3 月

地球環境科学部開設 20 周年記念展開催に先駆けて

館長 時枝 務

地球環境科学部は、平成 10 年（1998）に開設されてから、今年でちょうど 20 周年を迎える。まことに喜ばしいことである。

地球環境科学部は、淵源をたどれば、昭和 22 年（1947）に開設された文学部地理学科に遡る。当時は、地理学は文学部のなかに位置づけられたわけであるが、実際には自然地理と人文地理の双方にまたがる教育がおこなわれていた。ちょうど、自然科学と人文科学の中間に、地理学は位置づけられていたことになる。自然地理、人文地理を問わず、地球の表面における空間的な現象を扱う学問として、地理学は受容されていた。むしろ、形式的には自然地理と人文地理に分かれるが、自然と人間をとともに見据えた総合的な学問と受け止められていたように思う。

実は、その淵源は、さらに遠く遡ることができる。それは、大正 14 年（1925）に開設された専門部歴史地理科である。専門部は教員養成を眼目とする学部で、翌年に高等師範科に改組されたが、ここから多くの地理学徒が巣立った。「立正の地歴」といえば、優秀な教員の代名詞のように受け止められた時代が、かつてあった。戦後、地理が社会科の一分野となったのちも、「立正の地歴」出身の教員の活躍はめばしいものがあった。

歴史地理科とはいうものの、歴史地理学を専攻するわけではなく、歴史学と地理学を学んだのであるが、人によって歴史学に傾注する者もあれば、地理学を一生の学問とする者もあったようである。ただ、歴史学と地理学をととも学ぶことによって、時間と空間の双方の視点から事象を理解する方法を会得できるメリットはあったようである。当然、当時の地理学は、人文地理に偏っていた可能性がある。

ところが、地球環境科学部は、その名称からして純然たる自然科学を連想させる。人間を取り巻く自然環境を研究するイメージが強い。従来の自然地理・人文地理という区分に従えば、当然大部分が自然地理に属するのであろうと、部外者にはみえる。むしろ、地理学にとどまらずに、地球科学・地質学・地震学・気象学・生物学など、本格的な理系の学問が主流であるという印象がある。イメージと実際は違うのであろうが、文学部地理学科から地球環境科学部への発展は、大きな画期であった可能性がある。

そのことは立正大学博物館の展示にまで影響を与えた。第 2 回企画展は、「南極、自然と人—南極観測の記録から—」であったが、当然地球環境科学部の全面的な後援によって実現した展示である。そこでは、どのような方法によって自然が観測され、記録されるのかが、具体的な器具や観測記録によって提示された。それは、混じれもなく自然科学の方法であり、誰でも追認できる公平さを備えた科学そのものであった。

今年、立正大学博物館では、地球環境科学部の活動の一端を紹介する展示を計画している。久しぶりの自然科学系の展示が、今から楽しみである。

第 12 回特別展報告

平成 29 年 11 月 1 日（水）から平成 30 年 1 月 31 日（水）を会期として、当館第 1 展示室にて熊谷キャンパス開設 50 周年記念 第 12 回特別展「立正生の学び舎－熊谷キャンパスの半世紀－」展を開催しました。

第 1 部では「熊谷キャンパスの誕生」と題し、第 2 キャンパスの候補地の選定から第 I 期工事（昭和 40 年～）、第 II・III 期工事（昭和 41 年～）、熊谷キャンパス再開事業（平成 19 年～）を経て現在のキャンパス至るまでを当時の写真をもとに紹介しました。

第 2 部では「熊谷キャンパス周辺の遺跡」と題し、熊谷キャンパス設置を前提とした開発にともなう熊谷校地遺跡の調査と、熊谷キャンパスの設置に関連しておこなわれた野原古墳群の発掘調査について出土資料とともに紹介しました。

第 3 部では「教育と研究」と題し、昭和 41 年に大崎キャンパスから移転した短期大学部や、昭和 44 年に設置された保育専門学校、教養部などを取り上げました。また熊谷キャンパスに設置された法学部（平成 26 年に品川キャンパスへ移転）、社会福祉学部、地球環境科学部についてそれぞれの活動と教育について紹介しました。

第 4 部では「学生生活」と題し、現在強化クラブに指定されている硬式野球部、サッカー部、ラグビー部の歴史とこれまでの成績についてまとめました。

会期中は 394 名の方にご来館いただきました。末筆ではありますが記して御礼申し上げます。



第 12 回特別展ポスター

お知らせ

熊谷キャンパス開設 50 周年記念
立正大学博物館 第 12 回特別展（移動展）
「立正生の学び舎－熊谷キャンパスの半世紀－」展

会期：2018 年 2 月 8 日（木）から 4 月 30 日（月）
場所：品川キャンパス 9 号館エントランス

※ 詳細は当館 HP を御覧ください。

URL : <http://www.ris.ac.jp/museum/>



展示の様子



品川展の様子

地球環境科学部 20 周年 地球環境科学部と立正大学博物館

地球環境科学部は平成 10（1998）年、短期大学部 I 部商経科の改組と文学部地理学科の拡充に伴ない開設され、今年 20 周年を迎えました。

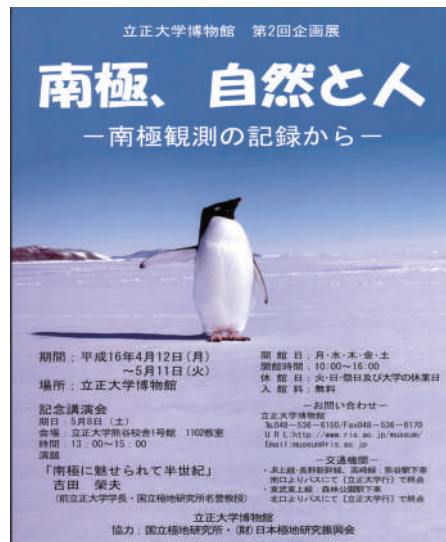
地球環境科学部は「環境システム学科」と「地理学科」の 2 つの学科で構成されています。

「環境システム学科」は環境問題を主に自然科学の側面から捉え、解明することに重点を置く学科です。生物・地球コース、気象・水文コースのいずれかを選択でき、両コースでは実践を重視した実験や実習、現場に応じた調査法を身につけるためのフィールドワークが実施されています。

「地理学科」は社会科学・人文科学的側面から人間と自然の関わり、地域性を解明することに重点を置く学科です。地理学科では地域の人口や経済などを学ぶ人文地理学と地形や気候、水文などを学ぶ自然地理学、特定の地域における性格を自然環境と人間生活との関係から総合的に研究する地誌学を学ぶことができます。また地理学科の歴史は古く、大正 14（1925）年に開設された専門部歴史地理科を前身とし、多くの教員、研究者を輩出しました。歴史と伝統ある地理学科では、これまでに収集された図書資料や地図など貴重なコレクションを数多く所蔵しています。なかでも「立正の地理」の礎を築き、地理学、地誌学の大家として著名な田中啓爾氏（本学名誉教授）蒐集の江戸期の和装本や古地図、絵図などのコレクションは立正大学図書館に寄贈され田中啓爾文庫として活用されています。



地球環境科学部の授業風景
(ドローンをあげての植生観察)



第 2 回企画展チラシ

平成 16（2004）年、立正大学博物館では地球環境科学部ご協力のもと、第 2 回企画展「南極、自然と人—南極観測の記録から—」を開催しました。

この企画展は吉田榮夫氏（第 28 代学長 本学名誉教授）より博物館への南極関係資料の寄贈を契機に企画されました。

企画展では吉田氏撮影の南極の自然や調査風景の写真、現地で採集した岩石標本や地図を中心に構成されました。なかでも国立極地研究所の協力のもと特別に展示された「南極の石」「コンドライト隕石」「鉄隕石」はひと際注目を浴びました。

また企画展開催期間中、吉田氏による記念講演会が行なわれました。講演会では吉田氏撮影の写真資料や実際に南極の氷を使用して南極の自然のすばらしさ、また厳しさについて紹介されました。



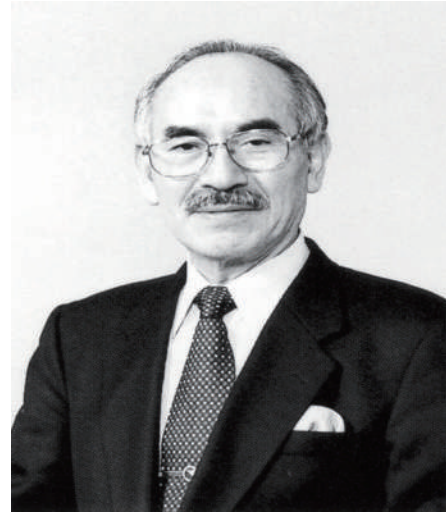
第 2 回企画展示風景

第2回企画展から14年。今年、地球環境科学部は開設20周年という節目を迎えました。そこで立正大学博物館では第13回企画展として地球環境科学部開設20周年を記念し、地球環境科学部名誉教授、高村弘毅氏（第29・30代学長）寄贈の自然関係資料を展示します。

高村弘毅氏は昭和12（1937）年、青森県に生まれ、昭和41（1966）年、立正大学大学院文学研究科地理学専攻博士課程を単位取得満期退学後、立正大学の学生部長、文学部教授・同学部長、地球環境科学部教授・学部長を経て平成16（2004）年4月に第28代学長に就任されました。また、日本地下水学会会長、全国地下水利用対策団体連合会特別顧問、東京地学協会理事などを歴任され、平成22（2010）年には立正大学名誉教授に就任されました。高村氏のご専門は水文学で、長く地下水について研究され、それに関連して世界各地の砂漠の環境調査にも数多く携わってきました。

第13回企画展では、高村氏がこれまで砂漠を中心として、世界各地の自然環境を調査された際に入手された砂や岩石などの貴重な資料を中心に高村氏の功績について紹介します。

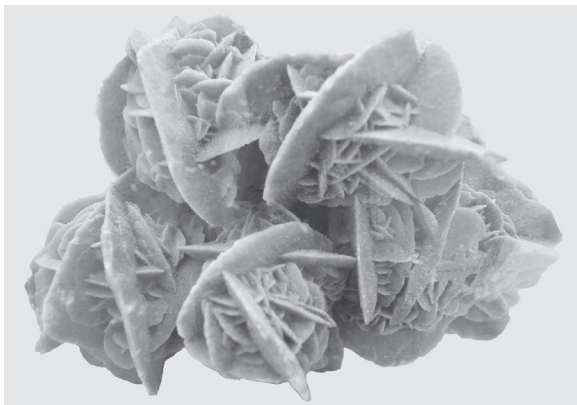
また本展に先立ち、平成27（2015）年度より資料整理の終了した一部資料を常設展にて展示していましたが、多くの資料は未公開のままとなっています。本展では寄贈いただいた82点の資料の中から新たに未公開の資料を高村氏の解説とともに多数展示します。



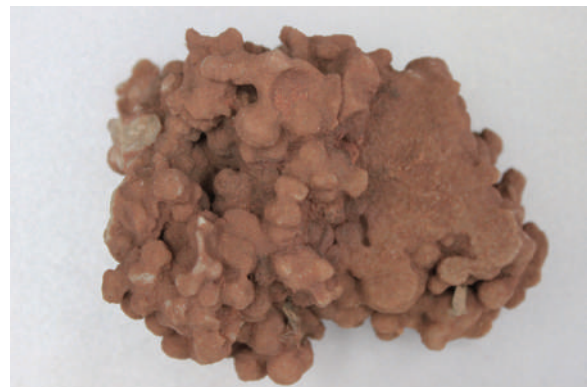
高村弘毅氏



砂漠の環境調査中の高村氏



砂漠のバラ



砂漠の真珠

資料紹介

井草遺跡出土土器について

(特定非営利活動法人 井草文化財研究所 研究員)

中野 拓大

1. はじめに

井草遺跡は東京都杉並区上井草四丁目に所在し、関東地方における縄文時代早期初頭の土器型式「井草式」の標式遺跡として著名である。しかし、井草遺跡の最初の調査者である矢島清作没後、調査資料が散逸し、その後も長らく調査が行われなかったことから、立正大学博物館が所蔵する吉田格調査資料がほぼ唯一の井草遺跡出土資料となっていた。平成(2017)29年、筆者は資料を観察する機会を頂いたので、本稿で本資料の概略について簡単ながら触れることにしたい。

2. 井草遺跡の調査

井草遺跡は、これまで5次にわたる調査が行われてきた(杉並区内遺跡発掘調査団 2012)。本遺跡は、矢島清作によって1937年の春に発見された。1940年12月、矢島らによって発掘調査(第1次調査)が行われ、出土土器をもとに「井草式」が設定された(矢島 1942)。その後、吉田格らによって、1949年8月に矢島調査地点の南側隣接地で発掘調査(第2次調査)が行われた(吉田 1951)。矢島・吉田調査地点の東側で、直良信夫は1956年4月に発掘調査(第3次調査)を行い、縄文時代草創期と考えられる尖頭器5点等が出土しているが、調査の詳細は不明である(直良 1965)。直良の調査地点と重なる範囲内で、井草遺跡E地点調査団は1999年1月～4月、開発に伴う発掘調査(第4次調査)を行い、立川ロームⅢ層～X層で旧石器時代の礫群を検出し、ナイフ形石器などの石器が多数出土した(井草遺跡E地点調査団 2000)。矢島・吉田調査地点の西側で、杉並区教育委員会は2009年5月、開発に伴う発掘調査(第5次調査)を行い、撚糸文系土器の時期と考えられる竪穴住居跡1軒、土坑6基を検出し、井草式を主とする撚糸文系土器が出土した(高野他 2011)。

3. 立正大学博物館所蔵の井草遺跡出土土器

立正大学博物館が現在所蔵する井草遺跡出土土器は47点である。吉田の報告・解説(吉田 1951・1990)によれば、発掘当初、土器が241点出土したようであるが、その後一部散逸があったようである。『吉田格コレクション 考古資料図録』における井草遺跡の解説では、本遺跡出土資料を井草Ⅱ式としている(吉田 1990)が、現存する資料を観察したところ、頸部に文様帯をもつ井草Ⅰ式新段階(原田 1991)(写真図版1-1～7)が主体をなし、井草Ⅱ式(写真図版1-9)、大丸式(写真図版1-10)が少数含まれているようである。杉並区教育委員会が行った第5次調査出土資料(高野他 2011)もほぼ同じ傾向を示している。

4. おわりに

井草式土器は関東地方各地で良好な資料が出土し、その内容がかなり解明されつつあるが、その原点となる標式遺跡出土資料として、立正大学博物館所蔵の井草遺跡出土資料は依然として価値が高い。近年、井草遺跡および隣接地で調査事例が増加したことから、今後さらに井草遺跡出土井草式土器の様相を明らかにできればと考えている。

最後になりましたが、資料を報告するにあたって、立正大学博物館の時枝務館長、吉水美紗登専門職員には便宜をはかっていただきました。厚く御礼申し上げます。

【引用・参考文献】

- 矢島清作 1942「東京都杉並区井草の石器時代遺蹟―井草式土器について―」『古代文化』13-9, 471p～479p, 日本古代文化学会
吉田 格 1951「井草式土器について」『武蔵野研究』6・7, 6p～10p, 武蔵野郷土会
直良信夫 1965『古代人の生活と環境』, 校倉書房
吉田 格 1990「12. 井草遺跡」『吉田格コレクション 考古資料図録』, 20p～21p, 立正大学学園
原田昌幸 1991『撚糸文系土器様式』, ニューサイエンス社

井草遺跡 E 地点調査団 2000 『東京都杉並区井草遺跡 E 地点』杉並区埋蔵文化財調査概報 9
 原田昌幸 2008 「燃糸文系土器」『総覧縄文土器』, 112p～121p, アムプロモーション
 高野和弘他 2011 「東京都杉並区井草遺跡第 5 次調

査」『平成 21 年度 杉並区文化財年報・研究紀要』, 58p～68p, 杉並区教育委員会
 杉並区内遺跡発掘調査団 2012 『東京都杉並区 井草遺跡 C 地点』, 杉並区教育委員会



写真 1 井草遺跡出土土器

NEWS ①

土器焼き実習

土器焼きは例年、文学部史学科の「考古学実習 6」の一環で行われています。今年度も、平成 28 年 11 月 3 日（金）・4 日（土）の 2 日間、博物館が協力し、熊谷キャンパス敷地内において行われました。

参加者は、考古学専攻生 6 名で講師の竹花宏之先生の指導の下、野焼きで土器を焼成しました。

土器は、品川キャンパスにおいて製作し、乾燥を十分に行ったのち、博物館に搬入し焼成しました。



考古学専攻生と完成した土器

NEWS ②

入館者数

平成 29 年 9 月 1 日から平成 30 年 3 月 1 日の間、延 110 日開館し、総来館者数は 619 名でした。内訳は、一般 513 名、本学学生 38 名、本学教職員 18 名でした。

以上の期間に熊谷キャンパスにおいてオープンキャンパスが 2 回行われました。その際の来館者数は 50 名です。

来館者往来

【団体】

- ・直実市民大学
- ・土器塾

刊行物

平成 29 年 9 月 1 日～平成 30 年 3 月 1 日までの期間に、以下の刊行物を発行しました。

◆『万吉だより』第 25 号（平成 29 年 9 月 1 日）

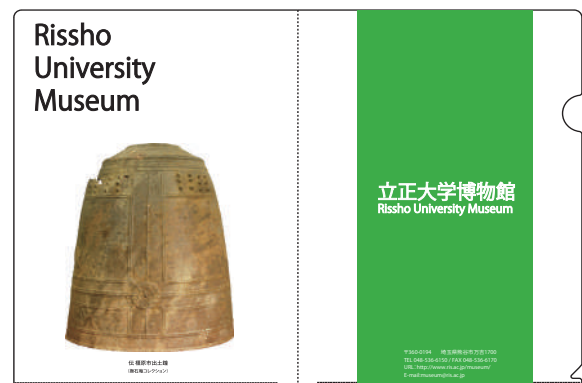
◆第 12 回企画展図録『板碑』

（平成 29 年 9 月 28 日）

◆第 12 回特別展『立正生の学び舎 - 熊谷キャンパスの半世紀 -』

（平成 29 年 11 月 1 日）

◆クリアファイル



H29 年度作成クリアファイル

資料の利用

平成 29 年 9 月 1 日～平成 30 年 3 月 1 日までの期間に、以下の資料貸出を行ないました。

◆貸出資料：称名寺 B 貝塚出土銚頭写真資料

貸出機関：大阪府立弥生文化博物館

貸出期間：平成 29 年 9 月 4 日（月）～12 月 3 日（日）

利用目的：大阪府立弥生文化博物館主催の秋季特別展展示図録掲載のため。

◆貸出資料：芝公園古墳出土人物埴輪、熊ノ郷遺跡出土石器、殿ヶ谷戸遺跡出土石器

貸出機関：武蔵野文化協会

貸出期間：平成 29 年 11 月 15 日（水）～12 月 15 日（金）

利用目的：武蔵野文化協会創立 100 周年記念展“武蔵野”研究 100 年 - 鳥居龍蔵と井上清 - において展示するため。

見学者の声

当館に寄せられたご意見・ご感想をご紹介します。今後とも、皆様の声を博物館運営や展示に反映できるよう務めてまいります。貴重なご意見・ご感想をありがとうございました。

◆大学の情報（プロパガンタ）がもっとあって良いと思います。考古資料館という雰囲気ですね。

貴学でなされている研究や教育の特徴・成果の展示も見てみたい。

(40代 男性)

◆初めて見学しました。興味深かった。

(20代 男性)

◆展示品の多さに驚きました。

(10代 女性)

利用案内

所在地：〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700

立正大学熊谷キャンパス内

TEL 048 - 536 - 6150

FAX 048 - 536 - 6170

開館日：月・水・木・金・土曜日（大学休業中を除く）

開館時間：10:00～16:00

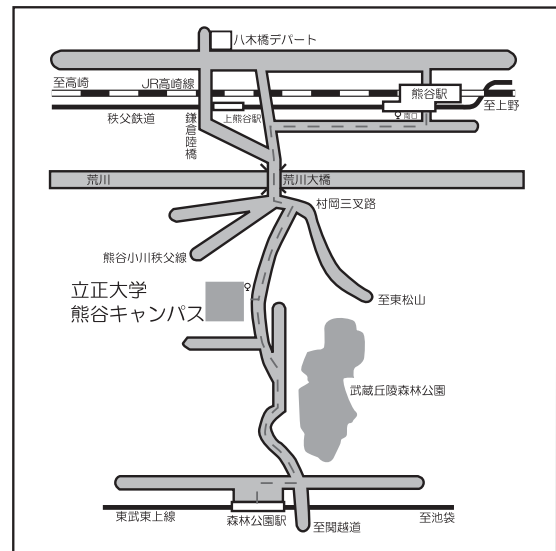
※詳細につきましては、博物館ホームページをご覧ください。

交通機関：

① JR 高崎線、北陸新幹線、秩父鉄道「熊谷駅」下車。
南口より立正大学行バス（国際十王交通）で約10分。

② 東武東上線「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス（国際十王交通）で約12分。

お問い合わせ：博物館または熊谷総務部総務課
(048-536-6010) にご連絡下さい。



あ と が き

今年度は熊谷キャンパス開設50周年にともない、立正大学博物館でも熊谷キャンパスの歴史を振り返る特別展を開催しました。特別展の開催につきましては本学同窓生、元職員の方々、現在熊谷キャンパスで教鞭をとられている教員の方々など数多くの方にご尽力いただきました。深く御礼申し上げます。

立正大学博物館館報 万吉だより 第26号

平成30(2018)年3月1日発行

編集・発行 立正大学博物館

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉1700

TEL 048 - 536 - 6150

FAX 048 - 536 - 6170

E-mail : museum@ris.ac.jp

URL : <http://www.ris.ac.jp/museum/index>

題字揮毫 田淵観斎（立正大学名誉教授）

(印刷：アサヒコミュニケーションズ)